2025 年フィリピン部会　能力向上プログラム（学術交流）参加報告

2025 年 9 月 12 日（金）から 14 日（日）まで、昨年に続きフィリピン及び国際歯科学士会フィリピン部会（PICD）を訪問してきました。ICD は国際学会（組織）として、海外諸国との交流・支援活動を通じて日本部会（組織）自体も発展と成長をしていくことが大切な要因ではないかとの視点で PICD とも数年前から接点を持ってきました。昨年の活動は「学術交流と実際の医療ボランティア活動」、本年は時間的な制約により「学術交流」のみとなりました。実際には PICD 主催の能力開発セミナー（注；講義・講演のみではなくハンズオンなどの実施を伴い、参加者自身もディスカッションする形式のセミナー）への参加だけではなく、University of the East （UE 大学）での学生に向けた講義も昨年と同様に行いました。講演者には宮崎真至国際理事と武内博朗フェロー、参加者として小野清一郎常任理事と秋山逸馬国際交流委員も加わりました。

9 月 12 日（金）

マニラ国際空港へ宮崎国際理事が到着・入国手続き等を終えたのが 13 時 20 分、そのままホテルにチェックインすることなくマニラ市内の中心にある UE 大学へと直接向かいました。フィリピンの首都マニラは幾つかの行政市からなり、マニラ市は正にその中心に位置してフィリピン国会や大統領官邸、そしてフィリピンの発展に伴う建築遺産などを多く有する地区であり、日本で言えば「千代田区」の様な地区といえば理解し易いかも知れません。UE 大学は其の周辺に多くの教会や他大学が隣接し、宛ら「神田から四谷」迄の様ですが、フィリピン特有の雑多さや南アジアの下町風情が残る一角に位置しています。UE 大学へはマニラ特有と言われる渋滞に巻込まれることなく 14 時 30 分前に到着することができました(Fig1)。この日は特に JICD による来賓特別授業と共にマレーシアから交換留学生（USIM；Universiti Sains Islam Malaysia〈マレーシアイスラム科学大学〉）も授業に参加していたため白や淡いピンクの色のヒジャブを付けた学生が参加していました(Fig2&3)。授業開始の号令に則され学生全員が起立、先ずはマレーシア国歌の斉唱に続きフィリピン国歌斉唱の後に講義に入りました。ただ、今回の活動の三週間ほど前より武内フェローの体調が優れなかった為に UE 大学での講義は難しい旨を伝えていました。そこで最初に登壇したのは UE 大学学長のイダ先生(Dr Iluminada L. Vilona)が歯内療法学に関する講義を行いました(Fig4)。イダ先生は学長就任以来、専門の歯内療法学の講義は後進の歯内療法学の新教授（PICD 会員）に任されているとの事で UE 大学の学生にも御自身の専門の講義を行うのは稀な事だと後に聞きました。イダ先生の講義に続き宮崎国際理事の講義では、日本の景色や医療施設のスライド等に驚きの声を上げたり、接着歯学臨床の動画に歓声を上げて受講していました。昨年もそうでしたが、フィリピンの歯学生が講演者の一言一句に反応する光景を観るとある意味新鮮な感覚を覚えてしまう日本人は少なくないのではないでしょうか。しかし学生達はただ素直なだけではなく、講義後の質疑応答でも「コンポジットレジンの光重合前後の色調の差異」等に質問するなど、意外としっかり聴いているのだと感じました(Fig5)。

(fig1) **(fig2)**

(fig3) **(fig4)**

(fig5)

Movie;IMG-9411

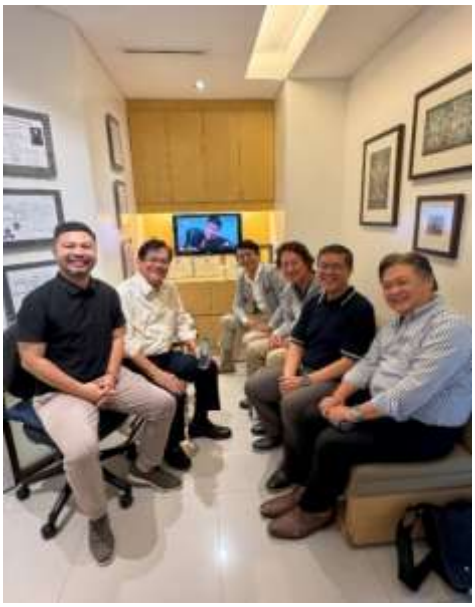
9 月 13 日（土）

翌日の PICD のセミナーは、フィリピンの多くの島々から受講する先生やマニラ市内の学校関係者が多く参加する都合上「日曜日が最適」という理由で JICD の我々としては予期せぬ「小休止」となりました。日程が決まった当初はゴルフ等を、との PICD からの助言も頂いたのですが、私と小野フェローがゴルフをしないという理由で午前中に昼食をとりながらショッピングセンターなどを見て、午後に PICD 国際理事ビレリア先生(Dr Hermogenes P. Villareal)のクリニックを見学させて頂くことになりました。向かった SM Asia Mall というのはアジア最大の商業面積を持つ複合施設で地場のショップと共に多くの海外ブランドも進出しています。土曜日で仕事が休みなのか朝から多くの家族連れや若者が自由に過ごしていました。軽くビールを飲んで昼食をという案で飲食店を探すも、多くの店はアルコールの提供がなく少し難儀しました(fig6)。午後からのクリニック見学は St. Luke's Medical Center という私立の総合病院の中にあり、ビレリア先生のクリニックのみでなく病院自体の施設も見学させて頂きました。この病院は当然フィリピン住人の健康を守るだけでなく、海外からの医療ツーリズムも受け入れている総合病院であり(fig7)、来院される国外患者はグアムやサイパン・パラオの外にもマレーシアや台湾からも受け入れているとの事でした。フィリピン自体の国内面積は日本よりも大きく、7000 以上の島々からなる国であることからロボティックスを活用した将来的な遠隔治療などにも力を入れていると説明を受けました。ビレリア先生のクリニック自体は外来病棟にありますが、全身的な検査や CT 撮影などの際には病院自体の施設を利用できるとの事です。ビレリア先生ご自身は、幾つかのクリニックをお持ちで今回訪問させて頂いたクリニックはペリオドンティストの次女と共同で診療をされているとの事でした(fig8)。見学後はフィリピンの歯科医療の現状や PICD の歩み等をお話し頂き(fig9)、終始和やかに出迎えて頂きました。夕食はビレリア先生のクリニックから数分歩いたフィリピン料理の店で PICD 現会長のクレメンテ先生と前会長のボンドック先生(Dr Fidel S. Bondoc)と頂き、ささやかな懇親会となりました(fig10)。この周辺はグローバルシティといわれ近年開発された地域で IT 企業や金融機関を多く含むビジネス街であり、海外駐在者等も住むコンドミニアムなどが集中する地域で、町並みは綺麗で、歩いている人は外国人や身綺麗にしている人が多い印象でした。ただ、終了後に送迎に呼んだ車が渋滞に巻込まれ、車待ちの時間と移動時間を合わせると St. Luke's に向かった時間の倍以上の時間になってしまいました。

(fig6)

(fig7)

(fig8)



(fig9)

(fig10)

9 月 14 日（日）

薄曇りの中、我々は会場のあるパサイ市へ 7:20am にホテルを出発しました(fig11)。パサイ市は前日に行ったショッピングモールのある地区で目の前はマニラ湾に面しています。パサイ市の多くは埋め立てで形成された行政市です(fig12)。そのために今回のセミナーが開催される会場の前はコンベンションセンター、その隣には世界最大と言われる IKEA があります。朝は渋滞もなく開始の 15 分前には会場である NU MOA Building(NU：National University)に到着しました(fig13)。到着後は挨拶や機材の接続と忙しかったのですが、驚いたことに本年のセミナーでは業者展示が 5 社出展していて能力開発セミナー自体がフィリピン国内で多くの歯科関係者に認知されていると感じました。また、この会ではフィリピン国内の学生に奨学金を渡すなどの活動も行われており、歯学部生の頃から PICD が関与していると推察されました。しかし考えてみれば当然なのですが、Dr Ottfy の活動自体もフィリピンで行われ、その後に帰国する際に立ち寄った日本で ICD 設立の起点となったことを鑑みても PICD がフィリピンにおいて歯科に多くの影響を持っているのが分かる一端だと思います。宮崎先生の講義と質疑応答は恙無く行われましたが(fig14)、昨年 UE 大学で講義後に「使用している器具は何処で購入出来るか…」等と質問されていたため、贈呈用に用意していた充填器セットの抽選会が行われました。続いて Zoom での参加を予定していた武内フェローの講義でしたが、武内フェローが体調悪化のため 12 日に入院することになった為、「もしも事態のため」に予め用意して頂いていた動画での講義となりました(fig15)口腔内環境が全身状態に影響を及ぼすことは PICD 会員も判ってはいるものの、実際的なデータを示した講義は余りフィリピンでは散見されない様で、武内フェローのビデオ講義を食い入るように観ていました。その後、昼食となり PICD 幹部と歓談し気分転換に会場外に出たところ、NU MOA の隣の教会から多くのフィリピン人が朝のミサを終えて出てきたのにも感心しました(fig16)。午後のセミナーはセブ国際大学の副学長による「歯科教育設立の青写真」(fig17)という内容でした。セブ国際大学は 3 年ほど前に設立された大学らしく歯学部の設置を進める上でフィリピン国内調査した結果を発表、そして PICD の意見や PICD 会員のディスカッションした結果を反映しようとするものでした(fig18)。我々JICD の参加者は講義まで拝聴した後に帰路に就いたため、ディスカッションの結果などは聞けませんでしたが、フィリピンの歯学部生の 60％弱は歯科に関係しない家庭の子息であり、40％強が歯科関係の仕事を生業としている家庭の出身という事で、これも日本の歯学部生の状況とは異なっていると思いました(fig19)。

(fig11)

(fig12)

(fig13)

(fig14)

(fig15)

(fig16)

(fig17)

(fig18)

(fig19)

以上、フィリピンは日本の隣国でありながら私自身もあまり知らない点が多くフィリピンに行く度に気づかされることが多いのですが、無数の島々からなる国で国民の貧困率 70%以上といわれる国内での歯科医療はどうなっているのか？当然 PICD の先生方は皆裕福であり社会的地位もあるため、これまでの経緯として PICD が自国内で離島診療活動や住居提供に奔走する一因が多少は理解できた 3 日間でした。その中で最も魅力的だったのは、歯学部生の明るさであり、その陽気さが彼らの歯科医療従事者として世界中で活躍する源泉と改めて感じました。これは多くの JICD の先生にもお伝えしている件ではあるのですが、医学部生や歯学部生の 2 割程度の学生が国内で医師・歯科医師になり、残りの 8 割は世界中に飛び出してコメディカルスタッフとして活躍する現実があります。JICD も今後実際的な国際貢献を行う際に「医療活動」のみならず「学術交流」や「知識の共有」なども交流の一手法であり、交流自体は共にゴルフや遊興を通じて継続するのも一端かと思います。

最後になりますが、今回の来比に関して多大なる配慮や調整をして頂いた PICD 会長クレメンテ先生(Dr Olegario G. Clemente, Jr.)、支援・協力頂いた GC 株式会社・GC Asia Pte. Ltd. 黒田様・GC Philippines. Dr Rob、およびサンデンタル株式会社臼倉様に感謝の意を表したいと思います。

（秋山逸馬　記）

昨年と同様に、フィリピン部会の活動を視察して参りました。９月１２日（金）のイースト大学での宮崎フェローによる講義では、相変わらず学生たちのエネルギーに満ち溢れた空気に圧倒されました。今年はマレーシアイスラム科学大学の学生もイースト大学への短期交流留学中とのことで、同席していました。彼らもフィリピンの学生同様、当たり前のように全て英語で会話しているのを見て、改めて日本の英語教育に疑問を抱きました。アジアの国々はいつの間にか、英語圏の国々へと着実に前進している姿を窺うことができ、焦燥感を抱かずにはいられませんでした。

１３日（土）はフィリピン部会としての活動はなかったため、我々日本部会のメンバーは、観光を楽しみました。午前中はフィリピンで最大と言われるショッピングモール「SM Mall of Asia」を訪ねました。このショッピングモールの巨大さは圧巻で、その大きさを表現するには私の語彙力は貧弱過ぎるほどです。端から端まで全てを見ることはおよそ不可能と思われる巨大さに、この国の臨海開発に賭ける意気込みがひしひしと感じられました。昨年も感じたことですが、近年のフィリピンの経済発展には目を見張るものがあると思います。

このモールで昼食をとり、我々はフィリピン部会の国際理事でいらっしゃるビレリア先生のクリニック（クリニックというより大病院内の歯科でした。）を見学させていただきました。フィリピンの診療室は日本のそれとほとんど同様で、レーザーやホワイトニングの照射器等の機材も配備され、まるで日本の診療室を訪れているような錯覚を感じました。歯科医療のクオリティもかなり高度であることが推測されます。

１４日（日）は、いよいよフィリピン部会主催のセミナー当日です。宮崎フェローの講演と武内フェローによるビデオ講演も無事に終わり、クレメンテ会長はじめ多くのフェローから感謝の意が伝えられました。改めて宮崎フェローと武内フェローには、この場をお借りして心より感謝申し上げます。有り難うございました。

（小野清一郎　記）